
娘になって～パパがあたしであたしがパパで！？～

ダブルネーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

娘になつてゝパパがあたしであたしがパパで！？ゝ

【Nコード】

N3644E

【作者名】

ダブルネーム

【あらすじ】

何故？私が娘に！娘は私に！慣れない女性の中に飛び込んだ中年男と野獣の如くオッサンの渦に投げ込まれたうら若き女性の逆転生活

はじまり（前書き）

エッチもあるかな？あるときは警告します

はじまり

朝起きたら私は和彦君に抱かれていた！

正確にいうと和彦君の胸に顔を埋めて眠っていた。

そこは和彦君と娘香代の寝室だった。

鏡には和彦君と香代が映っていた。

私の姿はなく香代が驚愕の表情で鏡を見ていた。

なぜか私は娘になり、娘は私になってしまった！

統べては和彦君と妻由岐の陰謀と知らずに……

娘として生きなくてはいけない親父の苦闘

愛される喜びに戸惑いながら

妻として

娘として

母として

生きる

慣れない に悩みながらも

一家の主として

男として

父親として

かつての母を

妻として

愛さなければ

ならない

戸惑いを乗り越え

男として生きる

そんな親子を描きます

慌ただしい朝の私（前書き）

娘視点の朝からです。

慌ただしい朝の私

うーん！私は両手を上げ伸びをして起きた。
いつも通りベッドの上だ。

ベッドからおりると目を擦りながら洗面所に向かう。パジャマを脱ぎ捨てると下着をぬぎすて洗濯機に放り込む。そしてスイッチをいれると浴室に向かう。些か二日酔い気味だ。お酒はほどほどにしないといけないが、仕事のストレス発散や人間関係などなど仕方がない。

私は頭から冷たい水を浴び酔いを醒ます。身体に生気が蘇るようだ。手早く頭をあらうと身体にボディソープをぬりたくり洗い出す。鏡にはそこそこの身体をした中年男がいた。
今の私だ。

今の私は20代のピチピチ（死語！？）した若妻ではなく中年のしよぼくれた姿だった。

ほんの一ヶ月前までは紛れも無く女だったのに……気を取り直す。
私は水を浴び体を引き締めると、今ではすっかり馴染んだ、産まれたままの姿で浴室を後にした。

「おはよう！ダーリン」

私がリビングにはいるとキッチンから若い女性の声がした。

私の名前は工藤健一。49歳。中年の域に入ったどこにでもいそうな男。同じ年の妻との間に娘をもうけ、今は単身赴任中だ。趣味は釣りと盆栽。既に頭は後退し中年の星まっしぐらだ。

いまは。

今は。

本当の私は違う

誰も信じてくれないけれど

私の本当の私は、

工藤香代だ

今の私の娘

なのに

私はパパ

私とパパは身体と心が入れ代わり

お互いの生活をならざるを得ない。

そんな毎日を送っていた。

主婦の朝は忙しい

ピ、ピピ、ピピピ

耳元でアラームがなる

私は素早くきるとベッドから抜け出した。

床に落ちているショーツやネグリジェを摘みあげると全裸のまま部屋をあとにした。

脱衣所にはいると洗濯機に下着や衣服を入れる。

洗面所の鏡には髪が乱れた私がいた。

私はブラッシングをし、軽く化粧をした。

慣れた手つきでブラジャーをつけ、ショーツをはき、ブラウス、スカートを身につけた。

主婦の朝は忙しい。しかも自分も働いているから尚更だ。私は手早く洗濯をはじめると朝ごはんを作り始めた。
昨日の晩、下拵えした材料を使い魚を焼く。彼は朝は和食！だから簡単には出来

ない。私は簡単だかきっちり仕上げていく。

「かずくん、朝よ」私は彼を起こしに行く。

彼の着替えを手伝い、朝食をたべる。

お出かけ前のキスをせがまれ応じる。ディープに舌まで入れられた。彼に抱きしめられた時、身体の芯があつくなり、昨日の余韻が再燃し濡れるのを感じた。

またショーツをかえないと。

彼を送り出して朝の片付けを済ます。

ワンピースに着替え化粧をはじめ。ナチュラルで派手にならないように。

ふと我に戻る

いかん！また香代に成り切っていた！

一日を香代として過ごし和彦くんを抱かれる毎日を過ごしているからかすっかり女になっている！

さっきもパパ……香代に電話している時も口調も娘そのものだった。話しているときの仕草まで！

何とかして戻らないと香代になってしまう！私はお気に入りハン
ドバッグを手にとるとパンプスをはき家を飛び出した

かわりゆくパパ（前書き）

お久しぶり。まだ序章に過ぎません。　こゆるりと

かわりゆくパパ

今の私は単身赴任。ホントならかずくとラブラブ生活なはずなのに会社の借りてるアパートになぜか同級生の静香と暮らしてる。いわゆる同棲。

今の私はどこから見ても男。残念ながら。静香は私とパパに起こった現実を理解してくれた。はず。

静香は私がパパの代わりに働く会社に勤務している。だから私たちはいつも一緒。私が慣れない男の身体に悪戦苦闘しているのをサポートしているうちに一緒に暮らすようになっていた。私とパパが入れ代わった事は静香を除けば二人だけの秘密。だいたい、そんな奇天烈な話、わかってくれる訳無い。幸い、私は…というよりパパは単身赴任だし、私たちは新居に住んでるから何とかなるかと安易に思っていた。が……

しかし……

神様は事をそんな簡単に運んでくれなかった。

私は単身赴任、対してパパは新婚ホヤホヤの新妻として家事はもちろん、立ち振る舞い、身嗜み、言葉遣いとか全てを私らしくしないといけない。

そして新婚夫婦なら当たり前の夜の営みも拒絶するわけにいかない。最初の頃は寝室は同じでもベッドは別々だったが、彼も必死に迫ってくるうちにパパも身を任せざるを得なかった。

パパにとって男に抱かれるというのはショッキングにほかならず翌朝、泣きながら電話してきたほどだ。

でも先週、彼が出張らしくママも友達と旅行で居ないからと私のアパートを尋ねてきたパパは大きく様変わりしていた。

あんなに嫌がっていたスカート……しかも私でも穿いたことのない位、短いミニをはき、キャミソールで巻き髪で現れた。静香と私とプールに行ったけど際どい水着ビキニを着こなしていた。

居間で三人で食事している時も静香とファッションの話で盛り上がっていた。

パパはすっかり馴染みつつあった。

馴染んでいく私

香代として和彦くん（今ではすっかりダーリンまたはあなたまたは和彦さんと呼ぶのが普通になっている）の妻の生活をしている私身嗜みや言葉遣いとかも会社や家ではれないようにするため、必死で演技していた。最初はビクビク、オドオドしていたがひとりきりの時も一生懸命、香代に成り切っていたため、和彦さんに怪訝な顔をされることも少なくなっていた。

すっかり主婦やOLに馴染んだ頃、和彦さんは出張、ママ（元々、私の妻）は旅行で家には私一人だった。ママからパパ（勿論、本当の香代）の様子を見てくる様に言われていたから、私は朝から準備をしていた。パパとは入れ代わってからは一回会ったキリで後はメールと電話だけ。私はシャワーを浴び丹念にネイルを施し、バツチリ、メイクをすると最近衝動買いしてしまったキャミを着た。そしてサンダルをはくと、車庫に向かった。

車庫には私が買ったレクサスと香代が独身時代に私にねだって買ったスマートがあつた。私は迷わずハンドバッグからスマートのキーを取り出し乗り込んだ。今の私にとってレクサスは怖くて乗れない代わりに和彦さんが乗り回している。関ジャニのCDを口ずさみながら軽快にはしりだす。ファッションビルが近づいて来た。

私は急にハンドルをきり駐車場に車を停めた。来週からジムに通うから水着を買わなくてはいけない。私は無難に競泳用とインナー、ニプレスを買った。店を出ようとしたとき、マネキンが身につけていたビキニが目に入った。気付けば試着し、レジに並んでいた。そして外泊用に下着を買い、ついでにヌーブラとベビードールを買っていた。

私はパパの住む町に車を走らせた。

有り得ないものがへやにある

ピンポーン

反応なし

もう一度

ピンポーン

私は背伸びして合鍵をさぐる。
漸く鍵を取り出し、ノブを廻す。

途中で買ってきた食材を食卓におくと久しぶりに入ったアパートの
部屋を見渡した。

なんだろう？

やけにサッパリしている

男、中年男の住まいとは思えない。

やけに綺麗。

私の女の勘が働く。

パパとは言っても中身は女の香代だからそうなのかもしれないが……

もしかしたら……

私の女の勘が的中した！

トイレのなかに今の香代には必要ないモノが備え付けられていた。

三角コーナー別名サニタリーボックス

洗面所には歯ブラシや化粧品

そして明らかに今の香代には身につける事の出来ない女性物の下着！

女がいる！

ママと言う存在がいながら！

私はかつての自分の身体が見知らぬ女と交わる様子を想像し、赤面した。

私は寝室を開けた。

明らかに男一人の生活とは思えないくらい整然としている。

しかし、ベッドには男物のパジャマだけでなくベビードールが置いてあった。

床には明らかにショーツとブラジャーが。

何だか怒りがわいてきた。

私ですら、会社の女の子をかわいいとか思ってたけど手は出してないぞ！

なのにいきなり女囲うか！？

女の敵だな

同棲しやがって！

毎日、パソコンバソコンしてるのか？

私は私の前の身体、則ち香代と見知らぬ女が私が腰掛けるベッドの上で交じり合う姿をイメージしていた。

なぜか香代に私が抱かれているように感じた。

何だか身体が熱くなっていた

私は腰をあげるとトイレに駆け込んだ。

スカートをまくりあげショーツを下ろして便座に腰掛ける。

ショーツが微かに濡れていた。漏らしたのでもなく明らかに濡れていた。

私は用を足すとナプキンを宛がった。

『あれ？まだ来週のはずなのに』

予定より早く生理がきたようだった

ちなみにナプキンも自分のじゃなく、トイレにあった。

私はリビングでひとり、腰掛ける

さあ問いたですよ！

パパとして男として

『課長、お疲れ様です』

『お先に失礼します。課長』

定時のチャイムが鳴り響くと、周りの人達が出ていく。

『ハーイ、お疲れ様』

私は書類に目を通してながら声をかける。

私がパパになり既に一ヶ月が経った。

そのうち、自宅に戻ったのは一回だけ。パパは毎週帰っていたのに、私は仕事が忙しいとか用事をでっちあげて帰らずにいた。

事実、パパとして慣れない仕事を覚えたり、接待ゴルフとか飲み会とか予定があつたのもホントの話。
パパの仕事の中身なんか全くわからないから最初は戸惑いの連続だった。でも毎日早く出社して残業しているうちに何となく熟せるようになっていた。

今ではすっかりゴルフも楽しめるようになり、会社の同僚や部下、女の子とも話せるようになっていた。

パパの仕事やそぶりに馴染んでくると環境や考えも変化して来た。実は入れ代わって最初の週末だけ帰ったのだけど昼間は仕事と言ってパパと情報交換していたけど、夜、寝室でママと眠っていたらママに迫られて男としてエッチしました。

気付いたらママのパジャマを剥ぎ取り全裸でママを抱き、ママの中に出していた。

『今日のアナタ、とってもワイルド』って囁かれて私は驚き、翌朝、

逃げるように家をでた。

ママを抱いて男になってしまった私は一人マンションで泣いた。
でも泣き声も低い男声。

身体もパパ。

白くてスベスベの手足、ほどほどに膨らんだ胸、形のいいヒップ、それら全てが消えうせごつごつした触るのも躊躇うくらいの身体に変化していた。一番の変化は今まで私には存在しなかったオチンチン。私が男であるといやがうえにも証明してしまうモノは毎朝私の意思に関係なく膨らんでくるし、シャワーやトイレに入ると意識してしまう。

私がオチンチンを除いてパパの生活になれてきた頃だろうか、私の環境変化が実感出来るようになっていた。

女の子として働くのと男で働くのは意味が違ってくる。

私は一応外見はオヤジ。

団塊の世代ってやつ。

腰掛け程度で仕事を甘く見ていた。それが課長になると周りの反応も気になるし、今まで自分と同じ立場にいた女性社員や若手の緩さに呆れてしまう自分がいた。知らず知らずの内に女の子とか見下すようになっていた。チャラチャラした恰好しやがってとか当たり前前の服装やオシヤレにも思うようになっていた。

止まらない男のセックス。私、童貞捨てました！？

そんなある日、私は得意先の接待だった。

毎日の特訓の成果か、ゴルフもパパ以上のスコアにおわり、懇親会でも上機嫌だった。業者と飲み歩き、気付けばキャバクラの女の子とアフターしていた。どうやらパパのお氣に入りらしく私の腕に絡んできたり胸を押し付けて来た。お酒のチカラもあったからか悪い氣はしなかった。

気付けば私は彼女と全裸でお風呂にいた。どーやらラブホの一室だった。

椅子に腰掛け背中を流してもらう。タオルじゃなく彼女の身体で洗ってもらう。前にまわると彼女はひざまずき私のオチンチンをパクツとくわえた。私が無くしてしまった身体を余すところなく使い、私は初めて体験する男の氣持ち良さに翻弄された。今まで氣持ち悪いものが余りの快感に凌駕してしまう。彼女の口の中に溜まっていた精液をぶちまけてしまった。

バスタブに彼女を抱き抱えて入り私は背中越しに彼女の胸を揉んだ。もうすっかり男スウィッチは入っていた。私が女だった時にしていたバストアップマッサージや彼の手つきを思い出しながら執拗に撫で回した私は文字通り、猿になっていた。今の私にはない器官を物欲しげに撫で回した。私のオチンチンは硬く熱く膨脹し収まる場所を求めていた。

ときおり上がる女の喘ぎは私を陶醉させた。私は溜まらず彼女の穴に挿込んだ。

『アン！アン！パパア！すごいの！私の中に出していいのよ！』
女の直感から今日が安全日と察したのか、それとも留まるところを知らない男の本能か、私は彼女の丸く突き出たお尻を勢いよく掴み、

ピストン運動を始めた。男としての初めてのセックスは私の中のものに変えるのに十分な作用を与えた。明け方近くまで私は男として性を貪った。情事を済ませ再びバスタブで彼女を抱いた。彼女の絶妙な舌使いで私のオチンチンは再び膨張し、透明の液体を放った。先端がヒリヒリと痛くなっていたが身体はひたすら彼女を求めている。

私の初めてのフーズク体験が終わった。

自己嫌悪

私は自己嫌悪に陥っていた。

ここは今の自分が住んでいるパパのマンションの一室

私は昨夜、パパの馴染みのキャバクラ嬢と一夜をともし、男として初めての営みをしてしまった。

かずくんとは私がまだ女だった頃、何回もやっていたが私自身、エッチにはそんな興味も無くただかずくんと一緒にいることのほうが楽しかったから内容はとってもシンプルだったのだろう。

パパは毎週帰ってママとエッチしてたくらいだから性欲は有り余っていたのだろう

その身体を受け継いだ私が絶倫になってしまふのは致し方ないとはいえ女の記憶を持つ私が男として女を犯すのは後味も悪かったしかし、あのときの私はまさしく男でしかも性欲に飢えた獣だった。

私はベッドに腰掛け自分の今の肉体を見ていた。

彼女にはあつた誇示する様な乳房は存在せず弱い乳首

キュッと締まった括れはない寸胴な腰

白く弱い腕ではなく毛むくじゃらで太い腕

今の私が紛れもなく男であるということを証明してしまうオチンチン

それは昨夜の情事・・・痴態を思い出すとともに天を見上げ屹立していた

「あー！なんでこんなことになっちゃたのお」

私は幾分薄くなった頭を抑えながら呻き声を上げる

しかし、ソプラノの高い声ではなく低くて太い男声が私の喉から発せられ現実にかえる

今の私は紛れもなく男

それは変えようの無い現実だった

私は痕跡を消し去るかのように着の身着のままシャワールームに駆け込む

冷水を頭から浴び、身体を洗い流していく

（あんなスベスベだったのに・・・）

かつての自分ではなく何故か昨日のキャバ嬢が脳裏をかすめる

意思に関係なく私のオチンチンが再び屹立する

私はたまらず握り締め上下運動を試みた

入れ替わった翌日、朝立ちに恐れおののきパパに連絡した私は眠気眼のパパに

「扱いてみるよ。あっさりおさまるぞ」

と言われそれ以来日課となっている

普通の女の子が男のセックスを知る。

それも自分で体験して

あり得ない

あり得ない

あり得ないけどこれが現実

私は私の身体を想像しながらフィニッシュしてしまった。

今の私にとっては一種の近親相姦

娘である私がパパを犯す

いや、娘である私がパパの身体を使って・・・

ややこしい

私は後始末をしながら股間にぶら下がるあれが私のものになっていることに複雑な気持ちでいっぱいだった。

私は仕事の身支度を整えながら朝刊を広げた

わたしにアシスタント

「おはようございます。課長」

「ああ、おはよう」

いつもどおり朝マックを食べながらメールチェックや新聞を机の上で読む

すっかり当たり前になった私の朝の風景

最初の頃は朝食とお弁当を作っていたがOLとは違い仕事が結構忙しくて

残業が多かったりして朝起きるのが億劫になり朝食に時間を割いたり弁当

を作ることが煩わしくなり出勤途中で朝マックを買い、昼間は弁当が出前だった。

女のときのほうが化粧とかで忙しいはずなのになんだか変な気分だった。料理なんか男の身体になってからは正直、数えるほどしかしていない。

激務で睡眠不足だから、朝起きたら速攻出勤、自然とマンションには洗濯物が溜まり、洗い物もたまってきた。

一応、休みの日に掃除したりしようと思ったものの、休日出勤や接待なんかで疎かになりつつある。

朝礼を済ませ朝の決済書類に目を通していると人事の女の子がやつ

てきた。

「課長、よろしいですか？」

私は頭を上げると胸を突き出した挑発的な服装をしている女の子が立っていた

女の子といっても本当の私からしたら年上だけだね

「なんだ？」

「課長、この間、アシスタントがほしって言ってましたよね？」

「うーん言ってたっけ？」

「言っていましたよ！沢井課長の送別会するとき」

パパがパパのときに言った話しかあ

「課長のお好みどおりの女の子用意しました」

彼女は「ピチピチの清楚な感じの女の子！手え出しちゃだめですよ」と耳元でささやく

今の私にとっては彼女のほうがタイプだけど

「池内静香さんです」

「池内静香です。よろしくお願いします」

軽く頭を下げる彼女をみて私は驚いた！

私の親友であつた静香だつた

アシスタント家にやってくる

静香は私に微笑みながら立っていた。

私は少し焦りつつ、彼女を私の隣の席に導いた。

静香は私の幼なじみで短大までずっと一緒。パパとは多分、面識はないはず。仕事を終えたのは夜8時だった。

『課長、お疲れ様です』

静香は机を整理すると着替えに部屋を出た。私は慌てて飛び出した。

「い、池内君」

なぜかどもりながら静香に声をかけた

怪訝そうな顔で振り返る静香

「課長、どうされましたか？」

「食事でもどうかなあ？遅くなったお詫びといってはなんだけど」

「奥様に叱られますわ」

「わたしは単身赴任だ」

「あっ！そうなんですかあ？でも、わたし魔性の女ですよ！課長のことメモメロにしちゃいますよ」
と笑いながら言う。

確かに静香だ。わたしの親友の。

「色々、話したいことがあるし・・・む、娘のこととか」

「あっ！やっぱり香代のお父さんですか？どこかで見たことあると思っていました！」

「まあ、会社の中じゃ言えないから・・・」

静香は指でOKのサインをすると、ロッカーに入っていた。

戸締りをして私と静香は会社を後にした。

「どこに行こう？」

「わたし・・・このあたりって始めて何で・・・課長、ご存知ありませんか？」

私もいつもはマンションから会社、ゴルフ練習場くらいしか行かないから、あったとしても今の身体ではおしゃれな店は似つかわしい。

「いやあ、知らないなあ」

「それじゃあ、課長のマンション行きましょう！わたし、料理作るのが好きなんです」

「彼氏に怒られちゃうよ！」

「居ないですよ！一人暮らしですから」

私と静香はスーパーに立ち寄り、食料を買い込み、荒れに荒れた私のマンションへと向かっていった。

端から見れば仲のいい親子・・・？かな

私は静香を見下ろしながら思っていた。

ワンピースの隙間から白いブラジャーに包まれた胸が顔を覗かす。

ゴクツと唾を飲み込む音が聞こえたのだろうか

「もう！課長ったら！

笑いながら睨む。

マンションに入ると「ちょっと待っててくれないか」

「課長、気にしないでください。男の人の一人暮らしなんか気にしませんから」

気にしないのか、静香はずんずんと進んでいく。

私は静香に・・・（前書き）

次回からパパ視点スタート！

私は静香に・・・

『うわぁ！男の人の一人暮らしですねえ』

なんとか部屋を綺麗にしてから静香を入れようとしていたのに、さつさと私の部屋に入って行った。

床に散らばる書類や雑誌とか仕事関係の物

帰ってきて脱ぎ散らかしたままの靴下やワイシャツや下着

パジャマ・・・

食べたあとの食器

リビングだけでなくキッチンまで”乱雑”という言葉がぴったりな部屋だった

慣れないパパの仕事に慣れるのに大変だった・・・というのは言い訳ですっかり

パパらしく馴染んでいたのだろうか？

静香は顔色一つ変えず「男の人の部屋ってこれくらいがいいですよ」

いいよ。静香、慰めてくれなくても。いやあきれてるのかな？

「とにかく！掃除からですね」

と言うとそそくさと整理を始めた。

小一時間経過

あんなに汚かった私の部屋はすっかりきれいになっていた！

そして綺麗になったリビングで私と静香は向かい合わせに座っていた。

「はい！課長、どうぞ」

机の上にはわずかな時間で作ったとは思えないほどの量のご馳走が並んでいた。

私は久しぶりの温かい料理に思わず喉を鳴らしてしまう。

静香は微笑みながら

「気がついたらくさん作っちゃいましたぁ」と照れている。

かわいい

不謹慎にも思ってしまう私。

やっぱりパパに馴染んでいるのか感情がでてしまう。

ダイエットなんか気にしないでいいから、私は静香の料理を平らげてしまった。

ワインとかだったらオシャレなのにパパの部屋には焼酎しかない。

私は静香とお湯割を飲みながらいろんな話をした。

そして肝心の話をしようと意を決して向かいあった。
「い、池内さん！いや、静香…」

告白そして愛人関係（前書き）

すみません！パパ視点はまだまだ先です。

告白そして愛人関係

「課長、奥様に叱られちゃいますよ。私も香代に叱られちゃいますよ」クスリと笑いながら私の左手からすりぬける。

いつの間にかお酒片手に静香を脇に寄せていたみたいだ。

「聞いて欲しい！私は……香代なの！」

「エッ！？そ、そんなこと」

「信じてもらえないけどホントの事なの！朝起きたらア、アタシ……パパになってたの」

私は静香に今までのいきさつを話した。

最初は半信半疑だった静香は私と静香しか知らない話をする頃には信じてくれるようになっていた。

「いろいろ、あったんだね。課長、じゃない香代」

「信じてくれるの！？」

「アタシのあそこの黒子の場所まで知ってるのは香代だけだよ」

「ありがとう。静香。」

「でも、香代、元に戻る方法わからないの？」

「なんでこうなったのかもわかんないのにもどりようがないわ」

「私も調べてみるから香代も調べないとね」

静香はテーブルの食器をかたつけるとバッグを手にとり

「それじゃ帰るね」

「かつ、帰らないで！」

私は今まで湧き出なかった淋しさが込み上げ静香を抱きしめた。

「いつ、痛いよ！香代！」

ドキドキが止まらない！

私は更に静香を抱きしめた。

ボタンとかばんが床におち、静香は身体を私に委ねた。

静香のファスナーを外した。

「香代のアソコ、大きい」

「言わないで」

「優しくしてね」

私は優しく静香を抱き上げ、ベッドに倒れ込んだ。

私は静香と結ばれ私たちは同居……他人から見たら同棲、しかも不倫の。が始まった。所謂愛人関係になった。

告白そして愛人関係（前書き）

すいません！パパ視点はまだまだ先です。

告白そして愛人関係

「課長、奥様に叱られちゃいますよ。私も香代に叱られちゃいますよ」クスリと笑いながら私の左手からすりぬける。

いつの間にかお酒片手に静香を脇に寄せていたみたいだ。

「聞いて欲しい！私は……香代なの！」

「エッ！？そ、そんなこと」

「信じてもらえないけどホントの事なの！朝起きたらア、アタシ……パパになってたの」

私は静香に今までのいきさつを話した。

最初は半信半疑だった静香は私と静香しか知らない話をする頃には信じてくれるようになっていた。

「いろいろ、あったんだね。課長、じゃない香代」

「信じてくれるの！？」

「アタシのあそこの黒子の場所まで知ってるのは香代だけだよ」

「ありがとう。静香。」

「でも、香代、元に戻る方法わからないの？」

「なんでこうなったのかもわかんないのにもどりようがないわ」

「私も調べてみるから香代も調べないとね」

静香はテーブルの食器をかたつけるとバッグを手にとり

「それじゃ帰るね」

「かつ、帰らないで！」

私は今まで湧き出なかった淋しさが込み上げ静香を抱きしめた。

「いつ、痛いよ！香代！」

ドキドキが止まらない！

私は更に静香を抱きしめた。

ボタンとかばんが床におち、静香は身体を私に委ねた。

静香のファスナーを外した。

「香代のアソコ、大きい」

「言わないで」

「優しくしてね」

私は優しく静香を抱き上げ、ベッドに倒れ込んだ。

私は静香と結ばれ私たちは同居……他人から見たら同棲、しかも不倫の。が始まった。所謂愛人関係になった。

女の子生活は（・ハ　ハ・）

「香代」になって一ヶ月。私は和彦くんにか何か！？怪しまれることなく暮らしていた。

内部はともあれ、表面上は夫婦。私はなんとか香代に成り切るように努力した。

慣れない化粧に悪戦苦闘し、女性らしい身嗜みやおしゃれにも気を配り、そして和彦君のご両親にも気を使い、そして女性特有の生理現象・・・いわゆる生理も体験しているうちに体に残る香代の記憶が私にも反映されるようになっていった。

最初は気恥ずかしかった「女らしさ」がいつしか当たり前になり、職場の同僚・・・といってもかつての私から見たら部下だが・・・との会話にもなれ、職場の上司や男性社員のプチセクハラも交わす様になっていた。すっかり同僚と女の付き合いにも慣れ、トイレでお化粧のチェックや給湯室でのおしゃべり…ドラマの話やファッションや女の子トークが自然に交わさるようになっていった。

香代としての生活が当たり前になるとともに私のサラリーマンとしてのスキルが退化していった。

やはり腰掛け気分で仕事をしていていわゆる雑務が中心になると企画を立ち上げたりするのではなく、来客へのお茶だしや会議の資料のコピーやアシスタントだから作業中心になる。最初は退屈だったが周りに流されていったのか、当たり前になっていった。私自身、職場の男性社員やキャリアウーマンが眉間に皺寄せ仕事をするより笑顔を振り撒いてチャホヤされてるほうが良かった。実際、今の私は人妻だから無理に仕事にこだわらずにいることは家事や諸々の事にも都合よかった。

まあ出張で不在がちな和彦くんの相手をしないぶん女の子を満喫していた。

ステキな女の子ライフ

男時代とはまるっきり違うOL生活にもいろいろな問題はある。一応結婚しているから同僚から結婚生活について……具体的にいうとエッチな話を根掘り葉掘り聞かれる。私は香代の過去の男性関係とかはまったく知らないが香代として生きてる以上、逃げることは出来ない話題だった。

つい先日まで男だった私が娘になり、娘として夫に抱かれる。女として普通に喘ぎ貰われる。信じられないが事実だ。今まで存在しなかった性器がありそこに今まで備わっていた性器が挟込まれる。あんな凶暴で獰猛なペニスを恐れを感じていたのに、身体は幸せに満ち溢れてしまう。和彦さんに抱きしめられると安らぎを感じてしまう。

今の私はすっかり性に溺れていた。和彦さんに抱かれてねむることに幸せだった。かつて自分に備わっていたペニスを愛おしくくわえ舌でなめ回したり私の乳房や性器を嘗められたり愛撫されることに抵抗を感じないくらい香代になっていた。だから同僚とのエッチな話や職場の男性社員とかのセクハラめいた会話も新鮮で私は楽しかった。「お先に失礼します」「男だった時にはまず言わなかった挨拶をすると私は同僚と連れだって事務所をあとにした。ロッカーに入り通勤着に着替える。最初の頃は下着だけの解放的な空間や化粧品や香水のむせかおる感じに戸惑っていたが

「郷に入れば」という諺にあるとおりすっかり馴染んでいた。下着だけの姿でガールズストークしたりする。私は化粧を直し同僚と会社を出た。

電車にのるため駅に着く。階段を昇るときはハンドバッグを後ろにして歩く。今日はミニを穿いてるからガードは完璧。

私は和彦さんのすすめでジムに通う事になった。和彦くんいわく、「ダラダラしたセックスよりスポーツ感覚で楽しむセックスがした

い（　　〃　）「キャハ

和彦くんを抱かれることに最高の幸せを感じてしまう私も和彦くん
にいつまでも愛されるために身体のケアを欠かすことは出来なかつ
た。毎週一回のエステに加え岩盤浴、そしてお料理教室、フィット
ネスと仕事以上にハードな毎日だった。

既に会員だった同僚の紹介で案内してもらい私は申し込みをした。
香代になってからの私は香代の穴を埋めるために、香代の評判を下
げないために必死だった。体型を維持するためにダイエットに励み、
ファッション雑誌を読んで衣服やメイクを学んだ。和彦くんに疑わ
れないために抱かれた。でもそれは自然と私に快樂と幸福をもたら
せた。

ケータイをあけるとメールが入っていた。

「肉が食べたい。お風呂は後でね」

私は自宅に足を進めた。

裸エプロン

わたしはマンションに入った。スーパーの袋を脇に抱えながらエントランスを通り過ぎる。

品のいい老夫婦の管理人に軽く会釈をしてエレベーターに乗る。部屋に駆け込むと通勤に着ていたスーツを脱ぎ捨てる。体型補正のため身に着けていたボディースーツを脱ぎ捨てショーツとブラジャーだけを身に纏った姿でクローゼットの前に立つ。フッと息を吐き出すとショーツを脱ぐ。ブラジャーを外し、最近買ったばかりのピンクのエプロンを身に着ける。エプロンの後ろから形のいい大きなヒップが零れるのが恥ずかしい。所謂「裸エプロン」だ。わたしは誰もいないのに部屋の周りを見渡し顔を赤らめながらキッチンに向かった。

いつからだろうか？わたしが香代として和彦くんを抱かれ愛されることに喜びを感じるようになったのは。

香代になったばかりの頃は偶然だが和彦くんは出張で居なかった。慣れない男のしかも中年親父の私になってしまった香代の世話をすると香代が一人住む赴任先で二人で暮らしていた。それまで普通に男として生きてきた私にとって女の、娘である香代としての生活は戸惑いと驚きの連続だった。それは香代も同様で私に代わって働いたり男として振舞うことは堪らなく苦痛であり戸惑いの連続であったことは想像がつく。私は香代として女らしく振舞うように家事や身嗜みの特訓を受け、香代は私から特訓を受ける。いつしか言葉遣いも身体に合うようになっていったことは自然の成り行きであり、香代が入る私だった身体から発せられる体臭に嫌悪感を抱いたりすることも「女としての自覚」が芽生えてきた現われだったかも知れない。

それでも私は男に抱かれることには嫌悪感を抱いていた。生まれてきてから男として生きてきた私が身体が女に変化したからといってそうなることはなかった。女らしく振舞う練習として「仲のいい親娘」として遊園地に言ったときもお化け屋敷に入り、なぜか恐怖を感じ香代にしがみ付いてしまったがそれはただのスキンシップと感じていた。

しかし……

和彦くんが帰国することになり私が香代の振りをして二人で夕食をともしていたときだった。香代の身体はアルコールに非常に弱い。本来なら分かるはずなのに私はお気に入り焼酎をロックでやってしまった。前後不覚になり和彦くんに「お姫様だっこ」されベッドに横たわらせたとこまでは記憶があつた。そのあとは着ていた衣服を剥ぎ取られ全裸にされて愛撫されていたところで覚醒した。

「アッ！アアアアン」巧みな性感帯愛撫により私の身体は自然に声をあげていた。ベッドをのたうちまわるものの体力では絶対敵わない。私は足を閉じ進入を妨げようとしたが軽くないなされ私の足は広げられた。M字開脚の姿勢で私の抵抗をよそに和彦くんは胸を押さえながら進入してきた。私は初めての挿入体験に違和感と戸惑い、恐怖を感じた。しかし女の香代の身体はあがらうことなく和彦くんにしがみつき背中にも手を回す。私は和彦くんの逞しい身体に安堵感を感じていた。

翌朝、私は和彦くんの腕に抱かれて眠っていた。涙が零れ落ちとまらなかった。香代に電話したが夫婦にとって当たり前のことと言われたがかなり悔しそうな口調だった。

しばらくの間、出張の無い和彦くんは連日連夜、私を抱いた。本

来の私は毎週妻を抱きに帰宅するだけでは飽き足らず連日のようにソープランドや風俗、愛人まで作っていた。だから男のセックスは理解できたし、エッチも大好きだった下地があったからか女として足を広げ和彦くんとのセックスを欲し、帰宅するや否やセックスをねだるようになるのに時間はさほどかからなかった。次第に身嗜みや言葉遣い、しまいには思考まで女に変わって行くのが自分ですら分かった。

和彦くんを「ダーリン」や「ア・ナ・タ」と言って迫ったりコスプレグッズを買ってエクスタシーを感じることに情熱を傾けた。裸エプロンももっと愛して欲しいという私の限らない性欲の高まりからくる表れだった。

生理だから？抱かれない

アッ！濡れてる…

デスクのパソコンで仕事をしている。OLの制服で仕事をするのに
もすっかり慣れパンプスもはきなれた。最初の頃は男だった記憶か
ら足を広げて座ったりしていたが今では足を傾けてる。

女の子は常に緊張を強いられている。ブラジャーに覆われた私の乳
房はかなり大きい。立った時は足元も見えないくらい！

肩凝りも激しいから補整下着は必需品。下着の締め付けと昨日から
始まった生理の痛みが不定期にやってくる。朝起きると基礎体温
を測る。

私が香代になつてから欠かすことのない習慣である。

香代はまだ遊びたいからこどもは要らなかったみたいだ。

私としては初孫を見たいから早く欲しかったが今の私にとっては未
だ見ぬ初孫は私が体に宿し私が産み落とすわけだから祖父ではなく、
紛れも無い母親ということだ。私は仕事の手をとめ、制服の下に隠
れる乳房を眺めながら、妻が香代に授乳している姿を思い出してい
た。遡り妻の出産の時を思い出した。初孫は見たいが自分が産み落
とし、育てるということに恐怖をかんじた。妻は

「愛娘」の私に事あることに

「早く産みなさい」って言うが女としては初心者私には恐怖極ま
りない。それに今の私は和彦くんとセックスに溺れてしまつて
いる。男以上の快感をもたらす和彦くんのテクをもっと体験したか
った。意に添わない妊娠なんかしてしまったらせつかくの体験が中
断してしまう。いつ元に戻るかわからないだけに避けたい気持ちだ
った。私は机の引き出しからポーチをだすと席をたち、トイレに
向かった。

個室にはいるとタイトスカートのファスナーをはずす。

ガードルをぬぎさりショーツをずらす。

思っていたより血液は多く出ていた。

私はナプキンを疊んでサニタリーボックスに捨てる。そしてポーチからタンポンを取り出した。ナプキンは使った事もあるがタンポンは初めて。私はドキドキしながら差し込んだ。少し濡れてしまったみたいだ。私はイケないことをしてしまった中学生のように赤面した。そして再びスカートを穿き個室をあとにした。生理してるからなのか身体がふだんより感じる。抱かれない！いつも以上に依存心が高まる。男のフェロモンにクラクラしてしまう！私は気合いを入れてトイレを出た。あと2時間！がんばろう！

パパ？から電話

仕事を終えロッカーで着替えを済ませる。ハンドバッグの中からケータイを取り出した。メールが来ていた。宛名は

「パパ」 香代からだった。中身は簡潔だった。

「電話して」

私は残業している男性社員に挨拶すると会社を出た。すっかり慣れた手つきでメールを打ち込む。

「どうしたのお？（＋＋）」

「もうダメ」

「何がダメなのお？」

「そんな恥ずかしい」

「病院いったらあ？」

そんな事をやり取りしているといきなり電話になった。

低い声で

「あたしがこんなに苦しんでるのにわからないの！？」

「どうしたんだ？」

「なんだか体がおかしいの！ドキドキがおさまらないし、アソコモ

…」

私は

「何時からしてない？」

「なにを？」

「何ってオ、オナ…」

「ソ、ソナ触るのもいやなのに！」

「やらないと気持ち悪いだけだぞ！」 「そんなこと言っても…」

「男なら当たり前だ！」

「あたし、女だもん！」

「今はれっきとした男！チンポぶら下げた男だろ！」

「あたしの声でソナコト言わないで！」

香代は男の性欲が溜まってるみたいだ。私は思案した。

「エロ本買って出したらいいだろ！」

「そんな……恥ずかしい」

「ぬかないと身体にわるいぞ」

しばし黙りこむ香代。私は何も言えず返事を待つ。

「最近、変なの。朝起きたら大きくなるのはカズクンの見た事あるからわかるんだけどオシッコしても収まらないの。会社行ったら事務所の女の子見てるだけで膨らむし……」

襲い掛からないだけまだ理性はあるんだろう。私は安心したのもつかの間、

「事務所の女の子に抱き着いちゃった！」

駄目だ

私は頭を抱えながら妙案が浮かんだ。

私は

「それじゃ写メするから待ってろ」

香代のおかずに自分を差し出す提案だった。恥ずかしい気持ちもあったが自分が犯罪者になるまえに何とかしようとする娘心と聞いて聞かせ部屋に駆け込んだ。

娘のために一肌脱ぎます

寝室にはいるとクローゼットから水着や下着を取り出した。

私は香代のためにオカズになる決意を固めた。

さあ何からしようか思案したが壁際に制服があることを思い出した。今の会社の制服は胸の谷間を強調して結構ミニの完璧男視線のかなりキワドイものだ。男は私を含めて制服が好き。香代も頭ではちがうと訴えていても身体記憶が叫ぶ今は躊躇いながらもストライクゾーンに違いない。私は香代の代わりに使ってるblog用のデジカメをパソコンに繋ぎ私からも見えるようにセットした。

モニターを見ながら私はワンピースを脱ぐ。

動画モードは作動している。

気分はロッカーの中。

下着だけになるとブラウスを身につけボタンを嵌めていく。カメラを鏡に見立てる。モニターには谷間を見せ付ける私が映る。少し科を作り愁いを帯びた顔を作る。微笑みながらうなじをみせる。ショートを見せながらミニなタイトスカートを色っぽくゆっくりと穿く。制服をなめ回すように流す。プリプリのOLの口調で

「課長、私でよかったら」なんて言ってみる。たぶんここで叫ぶはずだ。私はタイトスカートのホックを外しファスナーを焦らすようにゆっくりと下ろしていく。

キャミワンがちらつと顔を覗かせる。

ブラウスのスカーフを外してボタンを三つ目まで外す。

前かがみになり、両手を内側によせると谷間がくつきりと現れる。

ブラウスもまた焦らすようにゆっくりとぬぎすてる。

キャミワンの肩紐をゆっくりとずらしていく。

足元にハラリと。

両手で乳房を隠す。

所謂、手ブラ。

ショーツは大事なところだけを隠したヒモパン。

周りには誰も居ないのに何だか見られてる気分。私の乳首は少し尖るような感じ。カメラの向こうの香代はパソコンの前で食い入るように見ているだろう。股間を必要以上に膨らませながら。私は身体のはてりを感じながら片手をちらつとあげて乳房をみせる。私の小さな手には収まり切れない乳房は私は中で軽く跳ね返る。身体はたまらなく熱い。ショーツがじんわりと濡れているのが感覚でわかる。片手で両方の乳房を隠しながら右手をつかいショーツをずらす。素早く股間を隠す。全裸の女神の姿になった。股間は熱く湿り気がある。和彦くんを抱かれたとき以上に興奮している。私は抱かれることを期待しているのかベッドに倒れ込んだ。カメラを手に抱えながら近付けた。

なめ回すように上からゆつくりとカメラを回す。そして下半身へ。産まれたままの姿でカメラを持つ私の姿は滑稽だろう。私は放尿シーン、オナニーシーンをじつくりと撮影した。

父である私が娘になって私の身体で娘に犯される。そんなシーンを想像すると喘ぎ声も次第に高くなる。自分が小娘になって犯されるのを恐怖感ではなく期待感にみち溢れていた。

娘のために一肌脱ぎます（後書き）

やっと父娘がシンクロします

自分をめちゃくちやにしたい！

パソコンの画面を私は食い入るように見つめていた。普段着からセクシな仕草で制服に着替えるパパだった。

（いつの間にそんな着替えが出来るようになったの？）訝りながらも展開していく。この間まで私が着ていた制服をパパが自然に着こなしている。ブラウスやスカートからちらちら見える下着は私が買った物ではない。すぐエッチでいつしか荒い吐息を出していた。パパは怪しげな顔付きで私を見つめる。制服を脱ぎ下着だけになったと思ったら肩紐をゆつくりと外しブラジャーを床に落とした。ゴクツと生唾を飲み込んでしまう。つい最近まで自分の身体だったはずなのに……鏡に映る姿は何回となく見ていたが画面を通して見るのは初めて。私の意志とは関係なく私の身体がうごく。そして私が入るパパの身体も私の戸惑いとともに熱くなる。

私は床に胡座をかいて座り込んだ。すっかり馴染んだのか汗の匂いはなにつく。食い入るようにパパの動きを見つめる。いつしか私はパンツをおろしていた。

パパが下着だけになっていた。私はブラジャーをはずそうとする仕種に堪らなく興奮していた。

ショーツを脱ぎトイレに入るパパ。

ブラを取り全裸になる

浴室で横たわり胸を掴みしたをさらけ出す

時折喘ぎをあげる

私は今まで触る事すら躊躇っていたオチンチンをにぎりしめグライ
ンドしていた。

パパの恥態に自分を重ね合わす。しかしすぐにギャップから視点を
切り替える。私は私を犯していた。

自分を抱きしめ柔らかな唇を奪い身体をまさぐる。高い声をあげる
女体をなめ回す。

ドピュ！ドピュ！

先端から白い粘液がほとばしり私は恍惚とした顔で画面をほつける
ように眺めていた。

もう耐えられない！

人に見られてるという意識が私を更に熱くしていた。香代は今頃、初めての性感にどうなっているだろう？今の私は自分の手では満足できなかった。（入れてほしい）身体が求めている。一足先に異性のセックスに溺れてしまった私は生理中なのに激しいオナニーをしてしまった。

誰かに抱かれない！私はカメラの向こうにいる香代を想像した。和彦さんとは違う男。肉体的には親子だけど私は堪らなく欲情していた。裸になり胸をわしづかみし、クリトリスを剥いた。甘い喘ぎをあげ香代の遅い体に自分の柔らかな身体をこすりつけ、無茶苦茶にしてほしかった。「アッハアアア」たまらず私は右手で乳房をわしづかみし、左手で性器を弄り始めた。乳首の先端は今まで感じないくらい敏感で堅く尖り、性器は熱くなっている。自分の細く柔らかな指先では感じない。次第に烈しくなっていく。

「アッ！アアン」高い喘ぎがでる。私はすっかり女に成り切っていた！

「は、はやく抱いて」私は香代に向けて叫んだ。

私は自分の体をあつくさせオナニーを繰り返す。たまらないくらい抱かれない！もう、身体を蕩けさせる歓喜の叫びと共に床に果てた。どのくらい時間が経ったのだろう？私は床でぼんやり天井を見上げていた。香代の反応を確かめようとモニターを覗いた。

誰もいない？

シャワーでも浴びに行っただろうか？私は恥態に使った下着や水着を拾いあげフラフラと立ち上がった。

ピンポーン

呼び鈴がなると同時に扉が開き、目をギラギラ血走らせた自分……いや、香代が立っていた。

娘に

「ど、どうしたの？」

思わず抱えていた下着で身体を隠す。

「もう！我慢出来ないの！」

香代は部屋に上がり込むと私を抱きしめた。

香代のたくましい両腕に抱きすくめられ私は身をよじろうとした。しかし香代の胸の鼓動が激しさを増し、顔に感じる。上目使いで香代を見上げる。香代は私の唇を奪い、下を掬込んできた！背中越しに香代の腕は私の身体を愛撫させた。私は身体の力がぬけ床に抱えていた水着や下着を落としてしまう。いつしか私も香代の身体に手を回し密着させていた。

小柄な私の身体を抱きしめながら烈しくキスをする香代に欲情している。私は自分の下腹部に当たるものを感じた。

香代は赤面しながら私を抱え上げ浴室にむかった。着ていた衣服をぬぎざると、再び私を抱き抱え室内にはいった。「もう、あんなに私の身体が激しかったら、我慢できなかったの」

香代は椅子に座りシャワーを出しっぱなしにしながら後ろから私の身体にもたれ掛かる。そして身体を押し付けて来た。

私は香代に胸を揉まれながら烈しく感情を爆発させていた。

抱かれない！

抱かれない！

抱かれない！

抱かれない！

抱かれない！

かりそめにも親子であつたとしても私の身体の女が男を求めていた。

私は香代の前にひざまずき下半身に顔を埋めた。ギラギラと天井を見上げるように屹立する、香代のオチンチンをくわえてしまった！

貪るようにしゃぶりつく。私は舌を使いなめ回す。香代は頭を押さえながら初めての快感を感じている。

「でっ、でるー！」

私の口の中に苦いドロツとした液体が噴射しドクドクと注ぎ込まれる。香代が頭を押さえ込んでいるため私は飲みこまざるを得なかった。私はすべてを飲み干しオチンチンを嘗めて綺麗にした。

「シテモイイ？」

香代は私に問い掛け、返事も聞かず私を抱き抱えた。

娘に抱かれて

ベッドに放り出された私は軽くバウンドした。

香代の逞しい身体が髪の間隙から覗く。

私は髪をたばねると上目使いに香代を見つめた。

香代の腕が私の背中にまわる。

逞しい胸の中で私の乳房が潰れそうになる。

身じろぐ事も出来ず私は香代の胸の中であがらう。しかし緩む事なく抱きすくめられる。少し隙間の出来た腋から手を回す。耳に熱く激しい吐息を感じる。私は同時に香代の鼓動を感じる。香代の愛撫が激しくなり私は時折声をあげる。股間の膨らみが次第に大きくなる。私は香代に抱かれたまま床に投げ出された。胸が高鳴るのを感じる。今の私にとって男に抱かれたことはあった。しかし香代として夫に抱かれたという、言わば夫婦の営みである。でも今は違う。娘の身体の間が私の間まで私が入っていた自分の身体に抱かれるのだ。自分に抱かれるなんて！？外見から見ても親子がセックスをするなんて！許されざる近親相姦だ。でも男の性欲を抑え切れない香代を鎮めるのは自分しかない。私は香代の背中に手を回し胸に顔を埋めた。

香代は激しく身体を揺する。

私をギュッと抱きしめる。

私と香代は瞳をあわせた。

香代の顔が私に近づき強引に唇を奪われた。

かさついた唇から私の潤いある唇に舌が挟込まれる。

私と香代は舌を絡ませお互いを求めあっていた。香代の右手は私のロングヘアを触り、左手は激しく身体を撫で回す。両手を使い私のヒップ、バストを撫で回す。私は女を知り尽くした香代のテクニクに高い喘ぎをあげる。香代の身体が腰が抜けてベッドに横たわる

私に覆いかぶさり私の女の証に手が伸びトロトロに溢れた蜜を掬いだし私に見せ付けた。「パパ、感じてる？もうたまらないのぉ！」天にいきり立つオチンチンをみると胸がキュンとなった。今まで当たり前前に私が使っていたそれを私は妻に使い香代を産ませた。それが今は私の身体にはいるうとしている。私は香代の下半身に身体を動かした。

ぴちゃぴちゃ

シュポシュポ

部屋の中で私と香代が身体を重ねている。シックスサインで互いのかつての性器を慰めていた。

淫らな香が充満し私は香代に優しく抱かれ倒れ込んだ。

私に抱かれる私

香代のいきり立ったオチンチンがゆっくりと私の体に挿入されている。「あつ！ああああん」

高くか細い声をあげる。和彦くんとは違う私のだったアレは濡れた私の身体に入る。

私の身体の中に入り込んでしまう。香代は私を腰から持ち上げる。そして、

「動くよ」

私の返事をきくまでもなく香代は上下運動をはじめた。

香代の下半身は別の生き物のようにうごめいている。私は香代にしがみつきながら逞しい胸板に顔を埋めた。

「イツ、イツクー」

香代が低い声で叫ぶ

「で、でてくる！」

「抜いてえ！」

私の叫びも虚しく香代は私の身体に発射した

ドクドクと中に注ぎ込まれるのがわかる。しかし私はあまりの快感に失神してしまった。

これがイクって感じなのか…

目をさますと香代がティッシュを使い自分の身体を拭き取っていた。私のアソコから出ていた精液はすっかり拭き取っていた。

私に気付いた香代が

「ゴメン、あまりに気持ち良かったから」

「やつちやつたな。近親相姦だぞ」

「そだね！」

「シャワー浴びようか」

香代は私を抱き上げるとお互い全裸のまま、浴室にむかった。いつしか私は香代の身体にしがみついていた。今の自分には強さと優しさを持つ香代……いや、

「パパ」を頼っていた。

座椅子に香代が腰掛ける。私はいたずら心が働いたのか、ボディソープを身体に塗り香代の背中に押し付けた。

「パパ、ア、アタシが洗ったげる」甘えた口調で囁いた

「パツ、パパ？」一瞬驚いたものの私が身体を擦り付けてきたことで無言になった。

ごつごつした身体に柔らかい身体を擦り付ける。

凸凹を形を変えて密着する私の身体。

さっきまでこの身体に抱かれていたとおもつと愛おしい気持ちが溢れてくる。香代に抱っこされるような体勢になる。お互いの胸がある。必然的に顔が近づく。私の胸の膨らみが香代の平らな胸板に押し付けられ、香代の逞しいあれが私のなにもない下半身にあたる。背中に手がまわりキスをした。唇を奪われ陶醉した表情になる。

「もう一回する？」私の胸を揉みしだきながら聞く。香代は私を壁に押し付けた。鏡に胸をさらけ出した私と香代が映る。香代はバツクスタイルで私を貫いた。

男って最高！

私はパパの身体で自分を犯している！壁に手をあて、パパの大きいヒップと括れた腰を掴んでパパの身体に自分の身体に生えたオチンチンをだしいれしている。パパはよだれや涙を流しながら髪を振り乱し高い喘ぎをあげている。私はそれに興奮し、腰を降り続ける。下半身に力が入り私はパパの身体に精液を出してしまった。

「^{なか}膣内はヤメテエ！」

パパは哀願したが男の性欲が支配する私には抑え切れなかった。自分の身体なんだから何をしても許される。そんな風に思っていた。オチンチンの先っぽがパパの子宮に当たり凄い快感が私を更におとこへと変えていく。目の前の淫らな女を無茶苦茶にしたかった。

私の体にしがみつくパパを私は蹴り倒した

私のだった胸をもみしだき

乳首を甘噛みする

ツンと尖った乳首がさらに堅くなり激しく感じるパパに嫉妬しちゃう。

私はパパの「女の子」の部分に顔を近づけた

ぞくつとした。

下半身を見るとパパが私のおちんちんを咥えていた。愛おしい表情で自分についていたおちんちんを小さな口に入れていた。

私もクンニをはじめた。

指でかき回すと共に大陰唇、小陰唇、クリトリスをなでた。

女の子時代の私が経験したことのない潮吹きをしてしまったパパに興奮した

もう、抱きたくて仕方なかった

外見は親子なのに私には禁断の関係ではなかった
単なる女を犯しかつた。

生理を経験したパパは女らしく悶える。私はパパの口の中に精液を
噴射すると再びパパの中に挿入を始めた。

朝になって（前書き）

とりあえず父と娘の禁断のHは終わりです。今後、お互いはお互いの性に馴染むのか興味深々であったりします。お楽しみに

朝になって

朝になり私は娘の胸の中で腕枕されながら目覚めた。お互い全裸で身体を触れ合っていた。

目覚ましをすばやく消すとたくましい娘の身体の内側から抜け出した。

床に散らばっている衣服や下着を拾い上げ、脱衣所に持っていく。

私の下着はデリケートだからネットに入れて洗濯機に放り込む。娘の衣服は乱雑に放り込んだ。女性物と男物には区別が必要だ。

私は洗面台の前に立つ。均整のとれた女体が映る。昨日の痴態を思い出すと顔が赤らむ。私は軽くメイクを施すと手際よく下着を身に着けキッチンに向かった。

朝食を作っていると娘が起きてきた。

「おはよう」

寝ぼけ眼で頭をぼりぼり掻きながらキッチンに入ってくる。私は「シャワーでも浴びたら？」と言うと娘は浴室へ向かって行った。

暫くするとさっぱりした表情で髭もそりステコにシャツを着たオヤジ……いや娘が立っていた。

私は食卓に娘を促す。娘は新聞を広げながらテレビをつける。そういえば私は娘の身体になってから新聞もテレビ欄と社会面位がほ

とんどで政治面や経済面は見るものが少なくなった。テレビもワイドショーやドラマばかりでニュースなんて皆無に近い。やっぱり置かれた環境の変化なのか株式欄をじっくりとみている娘の姿がとても奇異に感じられた。

「どうしたの？」

娘は私が眺める姿をみて言った。

「いやあ、すごいなあなんて」

「そんなの社会人のたしなみだよ」

私たちは朝食を済ませると娘は車で会社へ。私は電車で行くため別れた。

昨日の痴態はお互い何も言わなかった。いや、言えなかったのだろっ。

今更ですが

電車の中でメイクを直す。男だった頃はそんな女を見ると嫌悪感すら感じたが、自分が女になり女性専用車両に乗るようになって違和感を感じる事なくできた。コンパクトをあげ、口紅を直す。首筋に昨日の残骸が……キスマークだ。私は慌てて絆創膏で隠した。

「セーnpaーイ」

振り返ると同じ職場の佳奈子だった。

「先輩って昨日は単身赴任の旦那様とエッチの日だったんですかぁ？」

「ち、違っわよ」あわてふためきながら否定する。

「そんなあからさまに否定しなくてもぉ！夫婦なんだから」

「違っわよ！き、昨日はパ、パパと一緒にだったの」

「へー。パパなんだぁ。ダーリン以外にねえ」

「ナ、ナニ誤解してるの？ホントのパパよ」

「ホントのパパとエッチする訳無いじゃん！良いですよ。内緒にしますから。今日のおやつ、ゴチデス。」

ホントにパパなんだってえ！私の抗議虚しく佳奈子は軽やかに電車を下りていった。

今更な話だが、私は昨日は外見的に見ても親子水入らずでいた。しかもお互い裸で。
ただの男女なら自然な行為だが見た目も内面も親子が肉体関係をもつなんて！

しかも自分の身体を蹂躪したのは紛れもなく娘の心を持った私の身体。

私は自分に犯されただけでなく娘に犯された。正しく近親相姦だった

今更遅いが自己嫌悪だった。

過ぎ去ったものは仕方ない。私は昨日の記憶を美しい思い出と思い込んだ。何物にもかえがたいお互いを知り尽くした二人の愛情の高まりと感じたら自然に鼻歌が零れて来た。

気合いを込めてミニスカに胸元を強調したブラウスに着替えてオフイスにはいった。

「オハヨーゴザイマース」
部屋の中がどよめいた。

戻ってきた（前書き）

ご無沙汰してます！復活しました。どうぞ気長に見てください

戻ってきた

私は車を走らせながら昨日のセックスを思い返していた

パパを抱いてしまった。

男としてパパを

元の自分としてではなく

ただの女と認識していた。

あつ！だめ！勃起してきちゃった！

私は車を降りコンビニのトイレに駆け込んだ。

すっかり慣れてしまった立ち小便をしながら私は昨日の情事を思い浮かべていた。

パパの女らしいしぐさにドキドキしてしまった。

やっぱり女ばつかりの中にいたらああなってしまうのかな？

私も男ばつかりで男の振りしてるから男らしくなっただろうか？

私はコンビニでつい買ってしまったエッチな本を見やりながら車を走らせた。

会社に着いた。

私は車を止めると建物に入って行った。

静香はすでに出社していた。

「おはようございます」

「うんおはよう」

声を潜ませて私に話しかける静香

「昨日はどうしたの？」

「ちょっと家に帰っていたから」

「ふーんそうなんだ」

というと私のそばから離れていった。

何事もなく仕事は進み、気づけば8時を過ぎていた。

社内にはいつもの如く私と静香しか居なかった。

「さあ出来たぞ！これ、回しとして」

私は静香に書類をまわすと部屋を出て行った。

なんだか昨日とは違い気分も軽やかだ。私はコーヒーを飲みながら部屋に戻って行った。

「終わった？」

「はい。終わりました」

「それじゃ帰ろうか」

「香代！昨日セックスしたでしょ？」

誰もいない気安さからなのか静香は私に話しかけてきた。

「えっ！？―してないよ」

「うそ！女の勘って鋭いのよ！」

「私だって女だよ！」

「今はただのおじさん。女の勘を甘く見ちゃだめよ！」

「うん。やった」

「誰と？フーズク？」

「違う」

「もしかしてお母さん？」

「違うよ」

「それじゃ誰よ！……もしかして……」

私は何も言えなかった。でも静香は察したのだろう。

「呆れた。自分に欲情するなんて！」

「そんなこと……」

「まあ、仕方ないわね。今日は私を抱いて……男として」

静香は私の腕にからみついてきた。

私もなぜかいつもとは違い激しく唇を奪っていた。

論されて（前書き）

ゆっくり更新ですが完結目指して頑張るで！

諭されて

「あゝつかれた！」

私は鞆を床に投げると背広をベッドに投げ捨て、ズボンを床に脱ぎワイシャツにパンツだけの姿で冷蔵庫に向かった。

プシュ

炭酸の噴き出す音がする。

よく冷えたビールが喉越しにいい。

「んもう！皺になっちゃうじゃない」

静香はブツブツ言いながら私の脱ぎ散らかした衣服をまとめクロゼットにしまっていく。

そして陰に隠れるように着替え始めた。

「なによ？そんなじろじろ見ないで」

「いいじゃん。減るわけじゃないし」

「その眼がこわいの！」

静香はＴシャツで胸を隠しながら言う。

私はビール片手に静香に近寄る。

ぐいっとビールを飲み干すと静香を抱き寄せた。

「もう、汗臭いわよ！」

「どうせ汗まみれになるから早くやろっ！」

私は耳元でささやく。

「ダーメ。香代だったら清潔にしてないと！女の子じゃなかったっ

け？」

私は静香の甘い体臭を感じながらキスをした。

「もう、女心が分からないおじさんって嫌われるわよ」

「何言ってるんだ？静香だってやりたいだろ？」

私は静香を押し倒すと裸になった。

「ねえ、本当の自分に欲情するのって変態入ってない？」

「えっ？そんな・・・」

「さっき、あなたのケータイみちゃった。たぶん、私がいらないからもんもんとした夜になりそうだなって思っちゃた。」

私の昨晚が静香には見えてるようだった。

「もついいのよ。男なんだから。でもね娘とやったらだめよ。近親相姦は犯罪よ。」

ウインクしながら私に凭れかかってきた。

あたりまえに

ギシギシとベッドが軋む。

私は静香とベッドの中で揉み合いながら身体を貪りあっていた。

「あんな内気な香代がまさかお父さんを抱くなんてね」

私に抱かれながら静香が囁いた。

「で、どうだった？私の身体と自分の身体は？」

「んもう！静香！いいじゃないか！やっぱり男って最高！」

私は静香の胸に顔をうずめながら乳首を噛んだ。

「アッ！アアアアアン」

高い叫び声をあげる静香に私は襲いかかった。

「もう、香代のおそこがいっぱいいっぱいになってるね」

「もう入れてもいいだろ？静香のおそこも濡れ濡れだよ」

「もう！エッチなんだからあ」

私と静香は熱く口付けを交わしながら合体し、^{なか}膣にたっぷり注ぎ込んだ。

私の胸に顔をうずめながら静香はすやすや息を立てている。
私は静香の長い髪を撫でながら柔らかな身体をさわっていた。

昨日の自分は確かにおかしかった。

自分の身体に欲情してパパを抱いてしまった。

パパが女として私に抱かれ感じ、喘いでいる様を見ていると征服欲が擡げてきた。

すっかり馴染んだ男の性欲にすっかりハマってしまっていた。

元は女なのに…

かつての親友を愛人にして男として楽しんでいる自分が不思議だった。

でも今の自分に当たり前になっていた。

言葉もすっかり男になっている。

実際、静香を見ると填めたくてたまらない。そんな自分に不思議だと感じることもなく当たり前だと思っていた。

昼休み（前書き）

ご無沙汰しています。

愛読していた「挿入^{いれ}かわり、勃起^{たち}かわりの更新が全くありません」

TOT）／

どうされたのでしょうか？

モチベーション上がりませんがボチボチ再開します。

昼休み

もうすっかり馴染んでしまったOLとしての仕事。

ランチタイムを終え、トイレで化粧を直す。

男だった時は同僚と連れだってトイレなんて行かなかったが今では当たり前のようになっている。

しかし女だけの空間っていうのは本当に不思議だ。

女子更衣室、シャワールーム、女子トイレ、給湯室、いろいろあるが男には見せられない姿が現れる。それを見たら・・・たぶん、普通の男は見ることにすらないと思うが、幻滅してしまうに違いない。

お淑やかな社長秘書が下着だけの姿で胡坐をかいて寝そべっていたり、さまざまな男の品評会とかを平気でしている。やれあいつはセックスが下手だとか、思ってたほどあそこは大きくないとか男の前では絶対やらない下ネタを全開させている。

最初のころの俺はあまりの変貌に戸惑いを覚えていたが今では慣れ親しんでしまった。

「ねえ、香代？」

いつの間にか思考が男に戻っていた私は同期の早苗に声をかけられ、慌てて我に帰った。

「どうしたの？早苗？」

「香代ってエッチした次の日は服装も大胆だね。」

「な、なにいつてるのよ？」

「いつもは『人妻！』って感じなのに、なんか濃厚っていうのか単身赴任の旦那様と久しぶりにエッチした次の日は化粧も濃い目だし胸元バアアアンって開けてるしいい感じだよ」

「そ、そんなことないわよ」

私は首を振りながら否定した。

しかし私は昨日、禁断のエッチを楽しんでしまった。

単身赴任の旦那様をおいて「実の娘」とえっちしてしまった。

というより今の身体の場合、「実の父」としてしまった。

本能の赴くままに自分を受け入れていた。

血の繋がった肉親とセックスするなんて間違ってる。

でも今の私にはどうでもいいことだった。

「早苗こそどうなの？」

「なにが？」

「最近、欲求不満かしら？人のことばかり見てさ」

「あたしは大丈夫よ。毎日ばこばこやってるから」

「いいなあ」

「香代も浮気しちやいなさいよ」

「そんなあ！」

私たちの昼休みはそんな感じだった。

今の私には関係ない

キャッ！

どうしたんだ？

かよお！生理始まっちゃったあ

私の横で抱かれて、三度目のラウンドを始めようとしていた矢先だった。

シーツの上には鮮血が広がっていた。

私は体をベッドから起こすとソファに腰かけた。

「なんでよお」

静香は全裸のまんま、シーツを持って浴室に駆け込んだ。

私は勃起したまんまのペニスを鎮めようと弄っていた。

「うゝん苦しい」

静香は下半身を押さえながら部屋に戻ってきた。

「大変だね」

「んもう！他人事だと思って！」

これから静香は苦しみを味わうのだろうと思うとなぜか笑みがこぼれた。

「香代はいいよね？男にはわからないよね」

「そんな同意を求められても・・・」

当たり前の話だが今の私には静香の苦しみなんかわからない。自分にもかつてはあった痛み。でも今の私には他人事。

「女って大変だね」

「もう！香代にもわかってほしいなあ」

仕方がない。私には痛みを感じる器官もないのだから。

「静香、ここがおさまってくれないんだ」

私は起ったままのあそこを見せつけた。

「もう！はじらいもなくなったの？」

静香は少し興ざめするような口調で私に食って掛かった。

「しかたないだろ！俺は男で静香は女なんだから！」

「そんなこと言っても今はそんな気にはなれないの！」

少し怒ってる。

私は居間に歩いて行き、テレビをつけてアダルトDVDをみてオナニーを始めた。

「呆れた・・・こない女が横にいるのに・・・」

仕方がない。今の私は出しくて仕方がないんだ。

毎回毎回いやになる

うーん 辛すぎる

朝、私は目が覚めて身体の異変に気づいた。

もうすっかり当たり前になってしまった女の習慣。生理。

最初のころのように慌てふためいたりすることは無くなったものの、やはり慣れようがない。

私はタンスの中からナプキンを取り出すと股間に宛がった。

ショーツを穿くといつもとは違う感覚を覚えてしまう。

なんだか湿っぽい。

私はいつも以上に綿密に化粧を始めた。

どうしてかわからないが女同士では生理がわかってしまう。

いつもと同じふりをしていてもわかってしまうのか同僚に声をかけられてしまう。

私は香代に言わせると少し重いほうだという。事実、下半身はなにが重苦しく、乳房はツンツン尖っている。

ブラウスがされるたびに悲鳴を上げなくなるくらいの衝撃と言えばわかるだろうか？

香代といえば……

あの日から…私が香代に抱かれてから1週間が経っていた。

あれだけ激しく体を重ねてしまったのは自己嫌悪に陥ってしまうくらいのことだが、今の私の「女体」には影響がなかったことは幸いである。万が一、妊娠！ということになれば言い訳できないくらいの大惨事を引き起こしていたであろう。

それは私と香代の間の話ですむわけがなく、私と和彦君、香代と私の妻、香代と和彦君にとってということだ。

私は今は香代が入った私の身体と私の妻の娘になっている。

たまにしか会うことがないが本来の私の妻を私は「おかあさん」と呼んでいる。呼ばなくてはいけない。

妻は疑うそぶりすら見せず、私を娘扱いしている。傍から見たら仲の良い母娘だ。

それが父親と近親相姦したあげく、子供を孕んでしまうことは避けなくてはいけない。

しかも娘と思っていたのが実は夫であったなんて信じたくもない事実だろう。

まあ私にとっては安全日だということが救いだった。

私は安堵しながら自宅をでて会社に向かった。

煩わしい…（前書き）

リハビリです

すみません

期待している内容は次回からです

煩わしい…

女同士だと雰囲気からか生理中っていうのはわかるものらしい。

多分同じ痛みを共有しているからか、何にも言っていないのに周りが気を遣ってくれる。

まだ女初心者の俺としては大変有難い。

しかし憂鬱だ。下腹部がなにか重石を付けているようなどんよりした感じ。普段以上に女を感じてしまう。トイレに入りナプキンを代えていると情けなくなる。そして今の自分が出産する性であることを意識してしまう。このまま香代のままなら嫌でも妊娠、出産、育児というプロセスを踏んでしまう。まだ未体験だが「授乳」ということもしちゃうのだろう。妻が香代に母乳をあげていたがまさか自分がそんな立場になるとは！

いつもよりも心なしか張りをを感じる乳房に手を添えながら俺はため息をついていた。

「香代？今日はきついのか？」心配そうな顔つきでひろみがやってくる。

「うーん大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」微笑みながら言葉返す。

いつも通り、あわただしく一日が終わる。俺は周りに挨拶をしな

から事務所を後にした。

トイレに入りスカートを下す。ショーツを脱ぎナプキンを交換する。

うんざり…

毎度毎度のことながらかなり憂鬱だ。

女ってなんでこんな嫌な思いしないといけないのだろう？

俺は溜息を吐くと身嗜みを整え更衣室に入って行った。

マンションに戻る。俺は何も手に付かず床に座り込む。生理中はやたらと身体が疼く。セックスがしたい！！！！1

セックスしたい!!!!!!!!!!!!!!

でも……相手が……

思い浮かぶのは香代：和彦くんを抱かれるのはいまだ怖い。かといって元の自分に抱かれるのもどうかと思うが今の俺に香代のふりをするのも酷な話だった。

気付けばスカートの隙間に手を差し入れていた。

顔の见えない男に抱かれている。

今の俺にとって妻を抱くという男性的な性欲がわいてこない。

今のおれは女であって男の性器は持っていない。

必然的に男に抱かれることがデフォになっている。

高い声が自然に上がる。

停まらない

俺はイッテしまった

でも物足りない…

俺はベッドの下からあるものを取り出した。

ローター

バイブ

俺はスイッチをONにした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3644e/>

娘になって～パパがあたしであたしがパパで！？～

2010年10月9日14時03分発行